

聖書：ガラテヤ 6：6～10

説教題：蒔けば刈り取る

日時：2013年9月8日

「肉によってではなく、御霊によって歩みなさい」と勧めて来たパウロは6章1節で「御霊の人であるあなたがたは」と具体的な歩みについて語り始めました。今日開いている6節以降も、同じように御霊の人であるクリスチャンに対するパウロの勧めです。

まず6節に述べられていることは、御霊に導かれているクリスチャンは、みことばのために労している人と良いものを分かち合うということです。兄弟姉妹は互いに教え合い、互いに学び合うべきですが、やはり御言葉のために専心して携わる人が必要です。この世における一般の仕事をしながらかれをすることは通常不可能です。みことばを教える働きとその準備は、片手間ではできません。パウロがこのように書いたのは、ガラテヤの教会にはこうでない現実があったからかもしれません。みことばに仕える教師・伝道者たちが十分な経済的支援を受けていなかった。然るべく顧みられていなかった。それは教会に重大な結果をもたらします。御言葉の宣教とその準備がおざなりにされれば、御言葉が持つ力と栄養は弱くなります。それはサタンがもっとも喜ぶ状態を作り出すこととなります。

みことばの働きに専念する者が、その働きから報酬を受けるべきことは、他の箇所にも示されています。ルカ10章7節：「働く者が報酬を受けるのは、当然だからです。」1コリント9章11節：「もし私たちが、あなたがたに御霊のものを蒔いたのであれば、あなたがたから物質的なものを刈り取ることは行き過ぎでしょうか。」同14節：「同じように、主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活のささえを得るように定めておられます。」もちろんこの原則を悪用・乱用してはなりません。教師たちがこれに付け込んで金儲け・金稼ぎを目的としてはなりません。あるいは自らが支えられることばかり要求し、自らが果たすべき義務において怠惰・怠慢であってはなりません。しかし、みことばを教える人はその働きに専念し、十分な祈りと準備をもって御霊のものを分かち合う。そしてみことばを教えられる人は教える人とすべての良いものを分かち合う。特にそこで意味されていることは物質的・肉体的生活に必要なものを分かち合う。これが御霊に導かれている人が取るべき姿であるとパウロは語っています。

パウロはこの勧めが一層効果あるものとなるための真理を7節で語ります。「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」農夫は種を蒔き、やがて時期が来て刈り取りをします。良い収穫を得たいと思うなら、まず良い質の種を蒔かなくてはなりません。また豊かに刈り取りたいなら、豊かに蒔かなければなりません。これは信仰の領域においても同じだということです。6節では伝道者への生活支援のことが語られました。生まれながらの人間としては、色々な理屈をつけて、そのためにささげることが最小限にしたい。しかしそうして蒔かないでいて、刈り取りだけ期待することはできるでしょうか。それは神を侮ることだとパウロは言っています。この

「侮る」とは「鼻でせせら笑う」という意味の言葉です。ここに言われていることをきちんとしなくても、自分への祝福はうまく巡りめぐってやって来るだろう、とは神をバカにすることです。しかしそうは行かない。その人は蒔いていないのですから、それ相応の収穫しか受け取れないのです。2 コリント 9 章 6 節：「私はこう考えます。少しだけ蒔く者は、少しだけ刈り取り、豊かに蒔く者は、豊かに刈り取ります。」そこは聖徒たちへの献金について語っているところです。それは自分の種を蒔くことです。しかし蒔く人は、その種蒔きによってやがて収穫を期待できる。蒔くことによって刈り取る。この原則を私たちは心に刻みたいと思います。

パウロは 8 節でこの原則をさらに広く適用しています。8 節：「自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。」自分の肉のために蒔くとは、自分の肉を満足させる生き方をすることでしょう。この世の楽しみ、自己中心的な目的のためにだけ、自分の財、時間、エネルギー等を使うこと。その人はその結果、滅びを刈り取ると言われています。一方、御霊のために蒔くとは、御霊が示す神の御心のために自分自身とその持てるものを投じることでしょう。その人はその結果、神の御心の道を益々進み、神が与えてくださる永遠の命という祝福の実を十分な形で刈り取る者となる。これはもちろん、わざによる救いを教えているものではありません。このガラテヤ書はまさにその考えを否定して来ました。救いは良い行ないによるのではなく、ただイエス・キリストを信じる信仰によります。しかし一方で私たちが覚えなければならないのは、よきわざが伴わない救いはないということです。私たちは良い行ないによって救われるものではありませんが、良い行ないに至るように救われています。御霊に導かれている人は、御霊に導かれている者らしい特性を、その生活に現わすのです。それは御霊のために蒔くという生活になって現れるのです。

私たちはみな神から何らかの種をいただいています。そしてこの節から気付かされることは、私たちは実は自分の肉のために蒔いているのか、それとも御霊のために蒔いているのかのどちらかの歩みを必ずしているということです。そしてそれを何のために蒔いたかによって、それぞれには全く異なった実りがもたらされるのです。果たして私たちは何に自分の思いを向け、何のために与えられた種を蒔いているでしょうか。過ぐる一週間、一か月、私たちはどんな収穫を期待し、どんな種蒔きをして来た者でしょうか。

9 節でパウロは「善を行なうのに飽いてはいけません。」と言います。私たちはすぐに飽いてしまいやすい者です。なぜかと言えば、せっかく良いことのために種蒔きをしても、その成果がなかなか見えないという経験を良くするからでしょう。今日蒔いた種が明日すぐに実りを出すなら、善を行なうことに飽くことはありません。失望どころか、やりがいを感じ、むしろ面白くて面白くて仕方がなくなるでしょう。しかし現実はそのとおりではありません。他者のために仕えることには労苦が伴います。人の必要にばかり目を向けていると、自分の財産が干上がってしまいます。また周りの人皆がそのように生きていけば励まされもしますが、しばしば他の人が冷淡に歩んでいるのを見ると、こちらの火まで消えそうになります。自分だけこのように歩

むのは空しいことではないのか。それよりもっと自分を満足させる歩みに向かったら良いのではないか、とのサタンの誘惑に屈しやすくなる。しかしパウロは9節後半で「失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。」と語っています。神はご自身の時を定めておられます。その日は必ず来るのだと確信して私たちは待っていれば良い。ヤコブの手紙5章にもこうあります。「見なさい。農夫は、大地の貴重な実りを、秋の雨や春の雨が降るまで、耐え忍んで待っています。あなたがたも耐え忍びなさい。」農夫は祝福の時が来ることをあせらずにじっと待っています。そのように私たちも耐え忍ぶようにとパウロは勧めているのです。そうするならば必ず時期がやって来て、喜びの刈り取りの日を迎えることになる、と。

10節：「ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。」この節の「機会」と訳されている言葉は、9節の「時期」と訳された言葉とギリシャ語では同じです。ですからここには二つの「時」が示されています。そしてこれらが語っていることは、刈り取りにも「時期」はあるが、蒔く時にも「時期」があるということです。農夫には耕したり、種を蒔いたりするのに適した時があります。その時期・機会を失ったら、後で蒔いても遅いのです。すなわち農夫が4~5月に蒔くべき種を、手元に置いておけなくなるのは残念だと渋ってその時期に蒔かず、夏が過ぎた頃になって、やはり蒔かなければ収穫の秋は期待できないと気づいて、それから蒔いたのでは遅過ぎるのです。10節の「機会のあるたびに」という部分には印が付いていて、欄外に「間に」という訳も示されていますが、まさに機会がある間に、チャンスがある間に、それをしなければなりません。愚図ったり、怠惰でいるならば、適切な時期を逸してしまいます。「今こそ、その時」という時のある間に、自分の持てる種を賢く蒔く必要があるのです。

そしてこの10節では、善という種をすべての人に対して蒔くべきである、と語られています。「あなたの隣人を、あなた自身のように愛せよ」との戒めは、ある特定の人たちにだけ限定されません。私たちの周りにいるあらゆる人が隣人です。私たちはそのすべての隣人の益に関心を持ち、善を行なうべきと語られています。と同時にパウロは「特に信仰の家族の人たちに」とも付け加えます。私たちはみな一人の人アダムから出たという共通の人間性を持つがゆえに、あらゆる人々と一つに結ばれていますが、その中でも直接的に血のつながっている家族とはより強く、緊密な絆で一つに結ばれています。そしてその家族に何かが起こった場合、家族である者たちは真っ先に助け合い、重荷を負い合うのは当然の姿です。とするならば私たちは信仰の家族の人たちに、特に善を行なうのは自然の姿でしょう。イエス様はヨハネ13章で言われました。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もし互いの間に愛があるならば、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」これを実践する時に、神が造り出している愛の共同体、教会の交わり素晴らしさが世に証しされるのです。

私たちは果たして自分に与えられている種を何のために蒔いているのでしょうか。持ち物、財、能力、特技、知恵、時間、エネルギー、人間関係、等々。これら蒔くことのできる種をどのよ

うに今ここで蒔いて生活するかは、実は永遠の価値と意味を持っていることです。この真理の光の下で、私たちは与えられている種を正しく、また賢く使う者でありたいと思います。神は侮られるようなお方ではありません。パウロは言いました。「自分の肉のために蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊のために蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。」 この真理を今一度心にしっかり刻みつけ、この真理が私たちのこれからの生活を支配するものとなりますように。聖霊がこの真理を絶えず私たちの心に思い起こさせてくださいますように。豊かな刈り取りのためには、豊かに蒔く必要があります。この真理に改めて目を開かれた者として、御霊のために豊かに蒔き、定めの際に豊かに刈り取る御霊の人の幸いな歩みへ導かれて行きたいと思います。